

# 社会心理学

清水幾太郎著

岩波全書



清水幾太郎

1907年東京に生まれる。

1931年東大文学部卒業，社会学  
を専攻。

著書：『社会学講義』、『論文の書  
き方』、『現代思想』他

訳書：E. H. カー『新しい社会』  
『歴史とは何か』，J. ティンベル  
ヘン『新しい経済』，M. ウェー  
バー『社会学の根本概念』他

社会心理学

岩波全書 150

1951年10月25日 第1刷発行  
1972年11月20日 第25刷改版発行◎  
1979年7月10日 第30刷発行

¥ 1100

著 者 し みず いく た ろう  
清 水 幾 太 郎

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

# 社会心理学

清水幾太郎著

岩波全書 150



## 序 文

私は、本書において、現代の資本主義社会に生きる人々の実際の心理、少なくとも、そのある側面を明らかにしようとする努力をした。それがいかなる程度まで成功しているかは、自ら顧みて、甚だ覚束ないが、しかし、社会心理学の中心の問題は、なんといつても、この点に横たわっている筈である。

もちろん、私が何を考えるにせよ、社会心理学には固有の歴史があり、また、固有の規格がある。私はつとめてこれを尊重しようと心がけた。けれども、現在のところ、社会心理学が最も盛んに行われている国がアメリカであるために、アメリカの社会および文化の特質が社会心理学一般の規格を決定しているように思われる。そして、アメリカ人の間に見出される、現在の社会秩序にたいする不思議な位に明るい信頼が、知らず識らずのうちに、右の規格の内部へ持ち込まれて、そのために、社会心理学自身がその中心の問題、すなわち、現代の資本主義社会に生きる人々の実際の心理を明らかにするという問題の大半を逸するに至っ

ている。私には、どうしても、そう思われてならない。それゆえに、私は、一方、過去における社会心理学者たちの努力と成果とに敬意を払いながらも、しかし、他方、できるだけ、社会心理学をこの特殊な規格から解放しようとし、試みねばならなかった。

これをいいかえれば、次のようになるであろう。社会心理学の問題領域を、集団の平面でなく、個人の平面に求めるのは、アメリカの社会心理学に見られる最近の傾向である。私も、集団の平面が社会学の問題領域であるのに対し、社会心理学の問題領域は個人の平面にあると思うのだが、ただ、私の場合、この個人を包む社会的なもの乃至集団的なものが、アメリカの学者たちの場合に比べて、著しい大きさ、深さ、厚さを帯びているとも言うべきか。とにかく、私はそのつもりである。

巻末の「文献解題」からも判る通り、私は自分の幾つかの著書を踏み越えて、かろうじて、今、この地点まで辿りついたのである。進んだのか、退いたのか、自分にも判らぬ。そして、いつものことながら、問題の一部を掴んだのが精一杯であって、落着いた、バランスのある叙述を施すというには至らなかつた。かたよった、我儘なものになってしまったかも知れない。読者に対して、世話をやいてくれた岩波の新美勝信君に対しても、これは申し訳ないことと思っている。

序 文

昭和二十六年九月

清水幾太郎



# 目次

## 序文

### 第一章 社会心理学の発展……………二

#### 第一節 群集心理の研究……………一二

##### 一 社会心理的事実……………一二

##### 二 群集……………一四

##### 三 公衆……………二三

#### 第二節 社会的人間の研究……………二六

##### 一 心理学の具体化……………二六

##### 二 本能論……………三二

##### 三 行動主義……………三六

#### 第三節 新しい問題および傾向……………四七

##### 一 三つの側面と見地……………四七

|              |    |
|--------------|----|
| 二 群集および家族の衰退 | 四八 |
| 三 最近の諸傾向     | 五一 |
| 第二章 近代社会の原理  | 五九 |
| 第一節 分 化      | 六〇 |
| 一 前近代的集団     | 六〇 |
| 二 近代的集団      | 六五 |
| 三 近代的人間      | 七〇 |
| 第二節 拡 大      | 七三 |
| 一 接触の拡大      | 七三 |
| 二 二つの世界      | 七八 |
| 三 コミュニケーション  | 八二 |
| 第三節 機械化      | 九〇 |
| 一 集団の機械化     | 九〇 |
| 二 ビュロクラシー    | 九三 |
| 三 社会心理の行方    | 九八 |

|                  |     |
|------------------|-----|
| 第三章 現代の社会心理      | 101 |
| 第一節 分 裂          | 103 |
| 一 家族の地位          | 103 |
| 二 集団間の無政府状態      | 109 |
| 三 「甲羅のない蟹」       | 114 |
| 第二節 マス・コミュニケーション | 120 |
| 一 コピーの支配         | 120 |
| 二 心理的暴力          | 126 |
| 三 社会的麻醉剤         | 136 |
| 第三節 機械時代         | 144 |
| 一 人間的部分品         | 144 |
| 二 欲求および願望の残存     | 151 |
| 三 新しい群集          | 155 |
| 第四章 適 応          | 162 |
| 第一節 集団への逃避       | 165 |

|        |          |     |
|--------|----------|-----|
| 一      | 家族への逃避   | 一六五 |
| 二      | 国家への逃避   | 一七三 |
| 三      | 階級の問題    | 一八一 |
| 第二節    | 単純化への欲求  | 一八七 |
| 一      | 偏見       | 一八七 |
| 二      | 二者択一     | 一九三 |
| 三      | イデオロギ―   | 二〇七 |
| 第三節    | 機械化の拡充   | 二二六 |
| 一      | 目的と手段    | 二二六 |
| 二      | 無力感からの脱出 | 二二九 |
| 三      | 機械としての世界 | 二三四 |
| 要約     |          | 二三三 |
| 文献解題   |          | 二三九 |
| 改版に当って |          | 二五三 |
| 索引     |          | 二五三 |

## 第一章 社会心理学の発展

社会心理学が十九世紀末葉に成立してから今日まで辿ってきた発展の跡を回顧すると、そこには自ら二つの傾向乃至段階が浮び上ってくる。もちろん、他の場合にもそうであるように、各傾向の内部には多くの学説が対立し合っているが、しかし、各傾向そのものの顕著な特徴は、何人の眼にも明らかである。すなわち、第一の傾向は、いわゆる群集心理の研究を中心とするものであって、十九世紀末葉から二十世紀初頭にかけて、フランス、イタリアの二国をはじめ、広く西洋諸国に行われた形式である。これに対して、第二の傾向は、社会或いは集団との関係において個人を研究するものであって、二十世紀初頭以来、イギリス、特にアメリカに発達してきた形式である。私自身としては、現代の社会心理学に固有な問題は、右の二つの傾向が到達した地点を越えたところに横たわっていると考えるが、今は、差当り、二つの傾向の特徴を簡単に叙述することから始めようと思う。

## 第一節 群集心理の研究

### 一 社会心理的事実

今日でも、世間の常識では、社会心理学といえは、直ちに群集心理の研究を思い浮べるのが常である。このような習慣は、個人の研究を主眼とする現在の支配的傾向から見れば、明らかに誤ったものであろうが、しかし、この習慣の背後にひそむ二つの事情は、若干の注意すべきものを含んでいる。第一に、社会心理学の歴史は、事実、群集心理の研究から出発しており、ル・ボン(Gustave Le Bon, 1841-1931)・タルズ(Gabriel Tarde, 1843-1904)・シグーレ(Scipio Sighele, 1868-1913)などは、群集心理の研究を通じて、それぞれ社会心理学の成立に寄与したのであった。<sup>(1)</sup>その上、彼らの業績は、一方、単に学問的研究の狭い領域に終始することなく、むしろ一種の文明批評として世人に訴える如きものであったため、また、他方、人類が積み重ねて来た古い且つ親しい経験に学問的な表現を与える如きものであったため、<sup>(2)</sup>速やかに一般の社会に受け入れられ、やがて、それ自ら現代文明の一要素となったのである。第二に、以上と結びついて、群集心理は、社会心理という日常の用語が指示する一群

の事実の典型となるに至った。曖昧ながら、この日常の用語が指示する事實は、その用法によって考えると、社会生活における或る特殊な領域、すなわち、個人としての輪郭も明らかでなく、また、集団としての輪郭も定かでないような領域を含んでいる。換言すれば、一定の目的へ向う手段の選択を合理性とよぶ場合、個人の側からも、集団の側からも、この合理性が見出されないような領域<sup>(3)</sup>を含んでいる。個人的にも、集団的にも、何か過不足のある、非合理性の領域である。そして、群集は、流行などと並んで、個人の平面と集団の平面との中間に横たわる一群の事実の代表者となる。このように、社会心理学を群集心理の研究と同じ視する習慣は、一方において、社会心理学成立の歴史的事情と関係しているが、他方において、社会心理という事実そのものと深く結び合わされている。後の点は、現代の社会心理学に固有な問題をとり扱うに当って新しい意味を与えられるであらう。

(1) 「現代の社会心理学が、この人々およびその後継者たちによって築き上げられたことは、一般に認められているところである」(Gardner Murphy and Lois Barclay Murphy, *Experimental social psychology*, 1931, p. 5)。

(2) 「こういう考えは新しいものではなく、以前から、学者ぶらぬ巧みな表現で述べられて来たものである」(Charles Blondel, *Introduction à la psychologie collective*, 4<sup>e</sup> éd., 1946, p. 6)。  
 ノロデル(1876-1939)の言葉は、ル・ボンの著書を指している。

(3) シゲールは、社会の性質は、これを構成する個人の性質から導き出される、というスペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の有名な主張をある程度まで承認しながら、しかし、それは、社会が同質的且つ組織的である時にのみ言いうることであって、異質性と無組織性とを特質とする群集の如き集団の研究は、個人の研究と社会の研究との中間に、独自の領域を占有すべきであると説いた(Scipio Sighele, *Psychologie des Aufbaus und der Massenverbrechen*, übersetzt von Hans Kurella, 1897)。

## 二 群 集

群集心理に関する当時の諸研究を通覧する時、我々の注意を惹く第一の点は、それらが何れも群集行動の非合理性を強調していることである。結局、群集とは、成員が直接的接触の状態にあって、その関心が一つの対象に集中され、いわば成員が対象によって全体的に把握されている如き、しかも一時的な集団であるにはかならないが、人間は群集の成員である限りにおいて、極めて非合理的な行動を営むということは、敢えて当時と限らず、その後の群集心理の研究が絶えず繰り返しているところであり、また、そもそも我々が日常の経験を通じて熟知し確認しているところである。「群集は推理せず」(La foule ne raisonne pas.)という諺にも見える如く、群集の行動を支配するものは、冷静な理性ではなく、かえって盲目的

な感情である。群集は感情の赴くままに押し流され、従って、理性が見定める筈の目標を通り越し、理性が教えるであろう軌道をそれて進んで行く。それゆえに、理性が生み出す積極的效果、理性が指示する迂路ではなく、往々にして、単なる破壊という消極の結果と、感情にとつての最短距離とが選出されることになる。群集である限り、人間は知のおよび道德的に低劣なものであることを避け得ない。群集の知のおよび道德的な低劣について、誰よりも雄弁に語った研究者は、いうまでもなく、ル・ボンであった。<sup>(1)</sup>彼に従えば、個人がその精神を有しているように、群集もその精神を有している。群集精神(*l'âme des foules*)は、人間存在の意識的部分に発するものではなく、その無意識的部分に由来するものである。意識的部分が人類の進化過程における新しい層であるのに反して、無意識的部分は古い層である。前者がなお弱いものであるのに反して、後者は強いものである。群集精神は、この古く且つ強い無意識的部分に根ざしている。「群集とは、知恵ではなく、かえって凡庸を積み重ねたものである。」文明社会の成年の男子にあつては、意識的部分が原始的な無意識的部分を統制しているとすれば、未開人、女子、小児においては、この統制が成功していない。しかし、文明社会の成年の男子といえども、一度、群集の成員になるや否や、右の統制は忽ち力を失つて、未開人、女子、小児のような行動を営み始める。